



「黒谷源空聖人」(部分)



「本願寺親鸞聖人」(部分)



「釋覚如」(部分)



「釋乘專」(部分)



和朝高僧先徳連坐像 (浄称寺蔵)

【解説】和朝高僧先徳連坐像（十祖像）

一幅 掛軸装・絹本着色
縦一三三・八cm×横五二・五cm

ここに紹介するのは、奈良県五條市大塔町浄称寺（浄土真宗本願寺派）が所蔵する高僧連坐像（和朝高僧先徳連坐像）である。南北朝・室町時代の制作と推定される初期真宗系の法宝物で、この浄称寺本はかつて宮崎円遵「蓮如の吉野の旅」（二葉博士還暦記念会編『仏教史学論集』、永田文昌堂、一九七七年）において論説されているが、その後は長らく研究者の目に触れていなかったものである。このたび、調査と紹介をご許可いただいた浄称寺住職の蒲生映詩氏に深く感謝申しあげる。

さて、初期真宗法宝物として史料的价值の高いうち高僧連坐像は、特に親鸞没後から南北朝・室町時代にかけて、その門弟集団が関東から各地に展開していくなかでしばしば制作された。戦国時代に蓮如が本尊の形式を統一していく以前、真宗門徒が礼拝対象の一つとしていた

と考えられている。広く中世絵画資料として、地域社会資料として、注目していくべきものである。

この浄称寺本は、表面の左上から左右交互に十人の高僧・先徳が連坐で描かれる像容である。経年の痛みは大きいものの、それぞれの像容に特徴は見え（法然の首をかしげる、親鸞・如信の帽子を首に巻くなど）、小紋高麗縁の上置に座し、法衣に袈裟を着け、数珠をつまぐるすがたを一貫している。最上部に色紙型があるが、銘文は見えない。

札銘部分に関しては墨付きが比較的明瞭で、文字を読み取ることができる。それによれば、「黒谷源空聖人」「本願寺親鸞聖人」「釋如信法師」「釋覚如」「釋乘専」「釋善入」「釋浄善」

「釋真浄」「釋圓智」「釋浄光」と記されている（宮崎論文では「黒谷」が「大谷」、「浄善」が「空善」になっているが、それは誤りである）。すなわち奈良吉野方面に教線を伸ばした覚如（親鸞曾孫）の弟子乗専の系譜が明確に示され、さらに覚如以下に敬称が付いていないことから、

制作が覚如存命中にさかのぼる可能性も考えられよう。また、乗専が描かれること自体、異例であり、さらにその下に善入以下五名も描かれ記されるところに、初期真宗門流における法脈が没後継承ではなく、同時代に重ねて行われたことを推測させる。

奈良吉野方面における初期真宗門流の歴史的事態には不明な点が多く、調査研究の意義は深いのであるが、こうした地域におけるきわめて貴重な法宝物史料の現存確認も難しくなっている現状がある。別に知られている五條市西吉野町円光寺蔵の和朝高僧先徳連坐像（四祖像「法然―親鸞―如信―覚如」）は今回、実見調査には至らなかった（『真宗重宝聚英』第八卷一三五頁）。

今後も研究アプローチを続けていきたいが、いずれにせよ、今回この浄称寺本の現状を確かめることができたのは、得がたい機会として特筆すべきものと思われたので、ここに掲出して概要を記す次第である。